

## 創立 142 周年記念式典 式辞

創立記念式典にご参列の来賓の皆様、ありがとうございました。たった今、永年勤続表彰を小チャペルでおこないましたが、長年活水を支えてくださっている教職員の皆様にもお礼を申し上げたいと思います。さて 1879 年創立の活水学院は今年 142 回目の創立記念日を迎えました。140 周年記念がつい先日のような気がします、コロナ禍は活水学院、長崎で、日本で、いや世界中で経済、政治的な混乱を巻き起こしています。それに加えて、米国や中国との関係や隣国との関係も新しい冷戦状態が形成され、国内では国債発行の予算により国の借金もうなぎ上りで増え続けています。将来への大きな不安が学生はじめ若者に募っています。教育は将来に希望を持ち、出口を保証することが大きな使命ですが、先行き不安が年ごとに増えているようにも感じます。創立記念日こそ、過去、特に創立の理念に立ち返り、苦難を生き抜いてきた先人に学び、将来を見つめたいと思います。

キリスト教の建学の精神から、隣人を愛し、社会に奉仕できる、自律した女性、経済的にも自立した女性を世に送るという希望に満ちた教育の理念を活水学院は掲げています。

1879 年の創立から 20 年後には「訓令第 12 号」が出され、キリスト教の宗教教育は正規の学校では禁止されるに至り、専門学校に甘んじる選択肢しかありませんでした。以後、次第にその制約は緩和されましたが、アジア諸国への進出により、1930 年代には日本やドイツ、イタリアの枢軸国と英米自由主義国との対立が激化しました。再びキリスト教学校は敵国宗教を奉じているとして礼拝や授業内容、さらには外国からの寄付金や給与等の送金が制限されるという経営上の大きな困難に陥りました。

今年 12 月 8 日は真珠湾攻撃の 80 周年目にあたりますが、太平洋戦争前の十数年間は活水にとってそのアイデンティティを捨てるか否かの瀬戸際に立たされた時期でした。1938 年には国家総動員法により生徒らの勤労奉仕が正規の授業となります。学校での思想教育は強化され「国体の本義」「臣民の道」が読まれることになりました。日米間の関係も悪化の一途をたどり、1941 年 3 月末には婦人外国伝道協会（WFMS）宣教師のほとんどが帰米しました。日本人教師、立花隆の父親の橘経雄（国語科教員）も数名の女性宣教師が活水を離れる 3 月に新しい職を探し北京に家族とともに移ったのです。

9 月の学院修養会で一部紹介しましたが、橘龍子（隆の母親）は、この活水学院のチャペルで洗礼をうけました。彼女の記録では 1940 年には米国からの送金が停止され、活水の教職員は隠れ農園で野菜作りをしたとの記載があります。一致団結し、教職員が隠れ農園で働く姿が目には浮かびます。日本人だけになった活水は岡部珪蔵氏を校長として、報国団を結成し、軍の方針に従い、教育指導を続けることで活水は存続できました。一方で私たちはキリスト教会の加害者としての戦争責任も忘れてはなりません。

さて、戦火がいよいよ激しくなり聖書の時間もなくなりました。しかし驚くべきことは、

教科外の活動として礼拝を活水では毎日行っていたのです。卒業式は「卒業礼拝」として執り行っていたのです。活水学院は教会ではありませんが、教育で活水が守ってきたのはまさに「礼拝」、そして礼拝のメッセージでした。礼拝は讃美歌を歌い、聖書を読むだけでなく、集まる人によって、神さまに祈る行為、それを活水は守ってきたのです。

140 数年の間で、活水で最も多く歌われた讃美歌は頌栄（24 番）でしょう。「たたえよ、主の民、みつかいと共に、恵みにあふれる、父・子・聖霊を」です。人間は全て主の民であり、主は恵みにあふれ、神である主をたたえる歌です。世の偶像、権威、支配者ではないことを表明・告白したのです。キリスト教は「全ての人間が人種や国籍は問わず等しく平等である」ことを宣言します。神の前での平等です。

戦前の国家イデオロギー、皇国日本の国家主義、国体護持には大変都合の悪い内容でした。その戦争へ向かう社会のなかで細々でも「主の祈り」は学内で唱えられ、活水の讃美歌「あまつましみず」（作詞永井ゑい子）が歌われてきました。この讃美歌はメソジスト系活水の特徴をよく表しています。彼女は活水と同じメソジスト系の海岸女学校（後の青山学院）で学び、作曲者 John McNaughton の讃美歌を訳した人物です。女性宣教師たちは教育理念として「敬虔、純潔、従順、自己犠牲」を身に付け、教育に携わりました。その基本が讃美歌の原詩にある家庭（HOME）でした。戦争に向かう銃後の母としての「良妻賢母」には、この「敬虔」さ、つまり神さまに向き合い、祈る内容がありません。「敬虔」とは神への信仰に根差したものだからです。

これらは国のキリスト教学校の中でも活水教育のまさにユニークな点です。これがなくなれば、活水は一私学として埋没してしまったことでしょう。だからこそ今、建学の精神に立ち返り、その視点から新しい活水教育を生み出していく使命が活水に関わる教職員にはあります。環境破壊だけでなく、人口減少や経済不安、感染症、貧困や格差など社会的な破壊が存在しています。長い歴史があるからこそ、先人が「心のよりどころとしたこと」を思い起こし学びたいと思います。

地上にあるものでなく神にたよる生き方、「活水は祈りの子」と言う先駆者の言葉の意味なのです。

学長 湯口隆司